普段着のわたしたち

4 月は総本山光明寺にて御忌会へ。

御忌会とは西山浄土宗宗祖法然上人の追悼法要、御法事です。総本山光明寺では毎年 4 月の 19 日より 25 日までおこなわれています。

紅葉で有名な光明寺ですが、個人的には新緑の季節が一番好きです。まさに緑のトンネルとなります。新しいカメラを仕入れたので散策がてら撮影していました。

征阿

息子がおままごとセットで私にご飯を作ってくれます。

「ママどうぞ。イチゴもあるよ。あ！ごめんなさいビール忘れちゃった〜。」と、必ず茶色の円筒形ブロックを添えてくれます。彼の中でビールはこのイメージのようです。

それより何より、「ママの食事にはビール」と思っている事に些か複雑な心境です。ま、間違っていないんですけどね（笑）。ママ、少し反省。

訶梨帝母

テレビドラマのなかで、セピア色のインクが存在することを知りました。PIOLT 製の『山栗』。余命少ない人が初恋の人に、「毎日、笑っていますか？　…　」と、手紙を書き始めるシーンです。筆は美しいガラスペンです。ガラスペンは日本の職人が生み出したことも知りました。

俊徳丸

子ども向けの賽銭箱が届きました。硬貨を所定の場所に置いて、軽く押すとスイッチ ON。ゴジラが叫び声を上げ、あの BGM と効果音が鳴り響き、赤く輝くライトと共にゴジラの目が海中からのぞき一瞬止まります。更にゴジラの顔が上がると海中から前足がヌーと現れて、硬貨は海中に引きずり込まれていくのです。

500 円硬貨まで使えますが、大人は軽い方のお賽銭を後ろの賽銭箱へお願いできればと。住職が ひ弱なもので(笑)。　迷走坊

『友引町内会通信』はパソコンやタブレットでもお読みいただけます。検索は http://www.daigoji-temple.jp/「友引町内会通信」をクリックしてください。寺務局

慶應四年(明治元年)五月三十日に没した新選組で最も有名な剣士、一番隊長沖田総司。幕末動乱の渦中、京の都を疾走し、労咳(ろうがい)という死病に取り憑かれ享年二十五歳。現在、六本木ヒルズを仰ぎ見る大都会のど真ん中、元麻布の専称寺境内墓地で眠っています。

二十数年前になりましょうか、墓参に出かけたことがあります。当時から祥月命日(総司忌)以外、一般人のお参りはできません。過去にお行儀の悪いファンがいたのでしょう。しかし墓地の塀越しにならば可能。ご親切にその塀に「入り口から二列目の右側、赤い屋根のついたお墓が沖田総司のお墓です」と貼紙があるので、私もその塀の穴に顔をねじ込まんばかりにして拝ませてもらいました。「今だったら、数珠を手に法衣を着て、ご回向させて頂きたいとお願いしたら入れてくれるのではなかろうか…」と思ってみたり。いつかご縁があれば試みてみましょうか。

こもりうた㉙

明治時代の作家、子母沢寛。彼は新選組を実際に知る人々に取材をして『新選組始末記』等の三部作を著しています。その中に「隊中美男五人衆」という項が。残念なことに、その五人衆の中に沖田総司の名前はありません。それどころか「沖田は色は浅黒く、肩幅広く、痩せていて背は高く、猫背のヒラメ顔。人懐っこい性格でよく冗談を言い、いつも子供らと遊んでいた」と、およそハンサムイメージではない記述があります。「ヒラメ顔」。誠に無念。

新選組随一の剣の使い手だったことは間違いないようです。しかし、沖田自身には佐幕だ勤王だという思想はなく、時代に翻弄された「新選組」という組織の中で、降りかかる火の粉を剣で無心に振り払い、己の命をも削ってしまったのだろうと想像します。それが後年突如「美少年の薄命天才剣士」に祭り上げられ、お墓にうっとり手を合わせる「仮説沖田総司ファン」の女性たちを、彼は少し面映い気持ちで草葉の陰から見ているのでしょうか。

夭折(ようせつ)、白皙(はくせき)の天才剣士、労咳で血を吐いて云々という文言から、いつの頃からか彼を描く小説などでは「美少年」というイメージが定着しました。ドラマや映画でも必ずその時々のハンサムボーイが役を演じています。はてさて真相はいかに。

「動かねば闇にへだつや花と水」

沖田の辞世の句と伝わっています。「花」が沖田自身、「水」が副長土方歳三を指すそうで、「病身で戦えないのなら、土方さんと一緒に居られなくなる」と嘆く様を詠んだのだろうとあります。

ふと、現代の紛争地域で、教育を受けぬままに銃を持たされる子供達と同じだったのかなという気がしました。

訶梨帝母

『私説法然伝』（２９）

極楽への道④

先月号では「念佛」について書きました。今月はその続きになります。

【阿弥陀佛への念佛とは何か？それについて考えるにはまず阿弥陀佛とは一体どのような佛であるのかを知らなければならない。阿弥陀佛とは、ある王が無上のさとりを得るために、世自在王佛（せじざいおうぶつ）という佛の弟子となり法蔵菩薩（ほうぞうぼさつ）となった。法蔵菩薩は全ての存在を救い取るという四十八の「本願（ほんがん）」（佛になるためにたてる誓い）をたて、途方もなく長い時間をかけて修行を重ねて、全ての「本願」を成就して阿弥陀佛となった。阿弥陀とはアミタ＝無量の意味を持つ。阿弥陀佛の別名には無量寿佛（むりょうじゅぶつ）と無量光佛（むりょうこうぶつ）とがある。無量寿とは無限の寿命を持つという意味になり、無量光とは無限の光を持つという意味となる。無限の寿命は「本願」＝救いは時間的制約を受けない、つまりいつでもいつまでも救い取られていることを示す。無量光の光は範囲を示し、全ての存在を照らす、つまり「本願」＝救いに範囲の限定がないことを示している。阿弥陀佛とは法蔵菩薩の「本願」＝全ての存在を救い取ることが成就したことを現した名前を持つ佛なのである。

では「本願」＝全ての存在を救い取るということはどういうことか？阿弥陀佛は、はるか昔に本願成就され西方極楽浄土という名前の佛の世界を建立され説法を続けられているという。全ての存在が、その阿弥陀佛の世界へ往き生まれ、阿弥陀佛のもとで佛と成っていくことが「本願」＝全ての存在を救い取るということである。

阿弥陀佛への念佛の「本質」は阿弥陀佛の「本質」とも言える「本願」への念佛とも言える。それはつまり「西方極楽浄土へ往き生まれることを願う」ということでもある。

では人々はどのようにそれを願っていたのであろうか？また、どうして願わなければなかったのであろうか？そして法然上人はいかにして「本願」と向き合う事になったのであろうか？】

現在の我々は「阿弥陀佛」に関しても「念佛」に関しても簡単にその詳細を知ることができます。しかし法然上人の時代は大変な苦労を重ね、勉学を重ねて、一つ一つ知識を重ねて、ようやくたどり着けたのでしょう。

また、今現在と違って日本で手に入る情報にも限りがありました。その中で人々がどのようにして阿弥陀佛や念佛と向き合っていたのかを見ていくことによって、法然上人がどのようにして「本願」と出会い、向き合っていかれたのかが理解出来るのではないでしょうか？

以下次号に続く

（征阿）

平和ボケ隊と他人事隊

もう３０年以上も前のことですが、私のいとこが高校を卒業して警察官になる時に、叔母が猛反対したことを思い出しました。「警察官になんかなってみぃ、ピストルで撃たれてまうにぃ！」（岐阜弁）。私の脳裏に『太陽にほえろ』の殉職シーンが浮かび、周囲にいた身内からも「テレビの刑事ドラマの見過ぎです」という声が聞こえてきました。長男が４月より陸上自衛隊へ入隊しました。今の私は、あの時の叔母の気持ちが少しわかる気がします。アメリカ大統領選挙では心の隅でヒラリーさんを応援していましたし、トランプさんが当選した時には、「これから自衛隊はどうなっていくのだろう」と重い気持ちになりました。食事中に世界のどこかで起きた軍事的ニュースや稲田防衛大臣、自衛隊のニュースが流れると自然と箸を止めて見入っていることに気が付きました。妻も同じです。はっきり、今まで他人事だったわけです。

それから間もなくして、長男の高校時代の後輩Ａ君のご両親が来訪され相談を受けました。Ａ君は県警を受験しましたが不合格になり、自らの意志で航空自衛隊に入隊することになりました。それでＡ君のお母さんは心配で心配で毎晩泣いているという相談でした。私の長男が同じように来春から陸上自衛隊に入隊することを担任の先生から聞いたそうです。藁にもすがる表情で少し困りました。ちょうどその頃は、中国や北朝鮮によるアジア圏のきな臭い情勢に加え、韓国政府が不正常になっていました。更に、選挙中に「日本から米軍すべてを撤退させる！」と叫んでいたトランプさんが大統領になってしまい、お母さんの心配は一気最高レベルに達してしまったようです。私たちにとって自衛隊は未知の世界で、具体的にいったい何を心配していいのかわからないのだけど、されど、とても不安というたちの悪いものです。以前、警察官をしている同級生が、「自衛官の任期を終え、警察官に再就職してくる人が時々いるよ」と言っていたのを思い出しお母さんにお伝えし、私の不安な気持ちも正直にお話しました。

私の 56 年間の人生は「平和ボケ」でした。他国の人が来日して、正午を知らせるサイレンを聞き「戦争が始まった！」と勘違いしてパニックなったと聞いたことがあります。世界的には、毎日緊張して生活しなければならない人の方がずっと多いのでしょう。

今まで私は岐阜県人でありながら、戦後、現在沖縄県に駐留するアメリカ軍海兵隊の基地が岐阜県(現在の航空自衛隊岐阜基地・各務原市)と山梨県富士吉田市にあった事を知りませんでした。檀家さんに聞くと、「女子供はアメリカの兵隊さんがいるので夜は絶対に出歩いたらダメ！」と強く言われたそうです。現に多くの風俗店ができ治安が相当悪かったそうです。それで地元住民の反対運動が活発となり、１９５６年、両基地から１万数千人の海兵隊員が沖縄県へ移留したそうです。岐阜県人が沖縄県へ追い出した歴史があるという事です。やはり、平和ボケから発生した「他人事」です。　俊徳丸

佛像を見せるなとは

去る四月十六日、山本幸三・地方創生大臣が、観光振興のために文化財を活用することについて「一番のガンは学芸員。この連中を一掃しないと」と発言し、翌日撤回に追い込まれました。

一報が流れた時に、「あれ、この発言は『国宝消滅』（デービッド・アトキンソン・小西美術工芸社社長著）に書いてあることそのまま」と気づきました。

京都御所の茶室は借りられるのに火を使えない、二条城の生け花展で水の使用が禁止になった等、学芸員という専門家による禁止事項の実例が挙げられています。

日本は国を挙げて観光立国を目指しています。しかし、国や地方自治体は観光資源としての文化財の整備に気づかず、補助は著しく建築物にかたよっています。お寺に祀られている佛像や、檀信徒による行事も魅力的な文化財なのです。そこに目を向けないと、文化財維持が困難になるのです。

拙寺には、平安時代後期に作られた胎蔵界の大日如来像が安置されていて、岐阜市の重要文化財に指定されています。

お堂が老朽化し、平成四年に前住が岐阜市の文化課に相談したところ、予算が余っていたのでしょう、建築費の一部が出ることになりました。その際、担当者が言ったことは「市役所は宗教には関係ありません。美術品の倉庫として造るのです」。

倉庫でも掃除は必要ですから蛍光灯を一つ付けてくれました。けれども、電気代はでていません。

「扉を閉めておけ」と言われたのです。

大日如来像が拙寺へ遷座されたのは寛文六年。以来三百五十年間、土地の守り本尊として、宗派に関係なく、地域住民が崇拝してきた佛像を「見せるな」とは・・・。

平安時代の佛像が小さな寺で残存しているのは、ひとえに地域住民の信仰心の賜。それが無かったら、重要文化財の値打ちのあるものが一つ消えていたはずです。

また、お盆過ぎに行われる「お堂番」という行事が人々の交流の場でもありました。

先住が大日如来像の修復を行い、私は地蔵菩薩像、阿弥陀三尊像、韋駄天像と修復を続けました。真に微力ですが、佛師さんの伝統技術の継承に資すると思います。

いくら重要な文化財でも、拝まれない佛像に存在理由はありません。また、お寺が「勝手に拝んでいってくれ」という態度で良いとは思いません。人が佛に手を合わす姿は美しい。その姿に接することも心が洗われる気がするものです。

佛教寺院で行われてきた一般的な文化事業としては、茶道・華道・日本庭園・文学・美術・建築・芸能・食事など、枚挙にいとまがありません。家庭から伝統文化が消えてしまった現在、かろうじて残っているのはお寺しかないのです。

迷走坊

観経物語（１０６）

正宗分（しょうじゅうぶん）その60
散善（さんぜん）上品上生その３

《私訳のつづき》

定善として、これまで依報（＝極楽浄土の国土の様子）と正報（＝極楽浄土の阿弥陀佛や諸菩薩の姿や形）を観察する方法が説かれたわけは、清浄で美しい様子を明かすことで、そこに生まれ変わりたい＝往生したいと思う心＝願生心を起こさせるところにありました。

その上で、ここからは願生心を持つ人々がどのような修行をしているのかを序分のところで説いた三福（＝世福・戒福・行福）の九品の修行の概念に当てはめて人々を区別して分け、さらにこれらの三福九品の人々が極楽往生を願う心のうちの序分欣浄縁の韋提希夫人の場合や第七華座観の未来の衆生のために説かれた佛力異方便、すなわち自分により自分の往生のための修行努力ではなく、他力による往生でなければ到底かなわないという真実を理解して受け入れる気持ちを持っているか（＝他力領解）どうかを解き明かす段階に入ってきたと受け止めましょう。

そして願生心を持った人は「三種の心を発せば即便往生す」と他力による往生を知って理解する人の心の中に分け入って三種に分類しておられるのですが、いきなり「一つには至誠心、二つには深心、三つには回向発願心」と言われるのみで、何の説明もされおられず理解しがたいところです。

では「至誠心」とはどんな心の有り様を言うのでしょうか。誠を至す心とも読めます、無理して読めば至れる誠の心とも解読できます。前者は自分自身の能動的な心の動き、後者は誠が自分に他から届いたという受動的な心と言えるでしょう。

つぎに「深心」とは何でしょうか。何が深い心なのか。先の能動・受動という分類で考えれば、ここでは他力を理解して受け入れる心が有ることを想定していますから、能動的に読めば深く他力を信じる心となり、受動的に読めば他力の働きが深く心に入ってくる状態をあらわしていると読み取れます。

さらに難解なのが「回向発願心」です。回向とは通常であれば、能動的には自分の修する善根を振り向けること。これを受動的に読むと他力によって他から善根（＝ここの場合は往生）を振り向けられることになります。発願とは、これも能動的には往生を願う心を起こすこと、受動的には往生して欲しい、または往生させたいと願う心と考えることが可能ですが、能動的なのか受動的なのかはまだここでは釈尊の深意は不明です。

《妙星斎》